

こちら仕入部

「本が死ぬところ 暴力が生まれる」

—電子メディア時代における人間性の崩壊—

パリー・サンダース著 杉本卓訳

I S B N 4-7885-0652-1

B6判・三五八ページ

定価本体二、八五〇円+税 新曜社

人間性の発達にとって
文字はなぜ大切か。
電子メディアの危険性は
どこにあるのか。

新曜社 定価：本体2850円+税

日本語題名は原題のサブタイトルから取った)。著者はカリフオルニア州ピツアード・カレッジの英語、思想史の教授。本書は「消えゆく口承世界」「文字の発明」「遊びとしての語り」「電子メディア時代と『人間』の変容」「識字の衰退と跋扈する暴力」「口承世界を育む母性」「家族と識字」の全七章から成る。

著者はこの中で、「自己」は口承文化、識字文化によつて形成される、そして今、それが喪失の危機に瀕しており、それを阻止する手がかりは「声」の回復にしかない、と訴えている。取り上げられている事例は主にアメリカのものであるが、近ごろでは日本でも少年犯罪など、信じられない事件が増加しており、他人事とは思えない。

識字とは単に読み書きの能力のことだけを指すのではない。それによって、人は内化し、経験へと移しもどすことができるようになる。また、識字世界に入るきっかけをつくるのは口承文化、そこで私たちは読み書きの基礎を築くのである。しかし、識字の重要さは、テレビ、パソコン、ゲームというさまざまな電子メディアによつて忘れ去られようとしている。学校や家庭の崩壊が叫ばれる今、「ことば」の持つ意味、そこで形成される「自己」について、本書は大きな問題を投げかけている。